

ASEV Japan 10 年 の 歩 み

エグゼクティブ ディレクター 横 塚 弘 毅
(山梨大学発酵化学研究施設)

ASEV Japan 設立のいきさつ

1980年から1981年にかけての約1年間、筆者は文部省在外研究員としてカリフォルニア大学デイビス校ブドウ・ワイン学科に留学した。このことが ASEV Japan の創設につながることは、そのとき全く想像しなかった。留学先としてカリフォルニアを選んだのは、1970年に山梨大学に赴任して以来、一貫してブドウやワインのフェノール化合物とタンパク質の化学的研究に取り組んできたが、その分野の世界的権威であるカリフォルニア大学シングルトン教授の下で研究することを望んだことと、どのようにしてカリフォルニアワインの品質がヨーロッパワインのそれに急速に追いついたかに非常に興味があったからである。カリフォルニアに到着後すぐにナパのカベルネ・ソービニオン赤ワインやシャルドネ白ワインの品質の素晴らしさに出会い、一層興味をそそられた。ヨーロッパに比べてワインの歴史に乏しいカリフォルニアがなぜこれほど優れたワインを生産できるようになったか、この疑問を解くことがカリフォルニア大学に留学する機会に恵まれた私のなすべき課題の一つと考えた。

カリフォルニアで最初に試みたのが、カリフォルニア大学でワイン関係の講義に出席することであった。そこでの第一の驚きは、カリフォルニア大学ではワインの非常に高度な講義を文科系の学生でさえ、一般教養科目として学べる機会があるということであった。第二の驚きは、カリフォルニア大学の教授陣とワイン業界との密接な結びつきであった。何人かの教授からたびたび「今日の日曜日〇〇ワイナリーに行くが、よかったら一緒に行かないか」という誘いを受けた。カリフォルニア大学のあるデイビス市を朝早く出発し、昼にナパ、ソノマ、サンタクララ・バレーなどに到着し、ランチを食べた後、目指すワイナリー（カリフォルニアではワインとブドウは一体なのでブドウ園へ行くといい）へ到着した。そこでは、カリフォルニア大学の教授が周辺の複数のワイナリーのエノロジストやヴィティカルチャリストを相手（10人のときもあれば20人のときもある）に、基礎的なブドウやワインの知識を講義し、また徹底的に実用面から討論を繰り返していた。カリフォルニア大学の、世界的に知られた教授連がこのような場所で、このような人達（といってもブドウ・ワイン学専門学科の卒業生であるが）と、このようなテーマでディスカッションしているとは、驚きと同時にアメリカの強さの秘密を学ぶ思いであった。同時に筆者が勤務している国立大学研究施設の社会における役割が何かをつくづく反省させられた。一方で、カリフォルニア大学ブドウ・ワイン学科がワイン業界への技術的サービスの見返りにカリフォルニアワイナリー協会を通して多額の研究費補助を受けていること、それが研究レベルの維持に役立っていることに羨ましさをおぼえ、日本でブドウ

・ワイン研究を行なっている人々への支援体制を各方面へお願いしなければならないと感じた。第三には、ワインとブドウとは不可分で、各ワイナリーが自社のブドウをワイン原料とするのが当たり前となっており、ブドウとワインを別々の分野とする日本とは大きな隔りがあるということを実感した。

1981年9月、いよいよ日本に帰る日が近づいた。カリフォルニア大学での研究成果をまとめてセミナーを行なって欲しいという要請がブドウ・ワイン学科よりあり、その準備に追われる一方で、帰国日が迫るにつれて、何とかカリフォルニアでの経験を今後に生かしたいという思いがつのるばかりであった。その一つの方策として思いついたのは、カリフォルニア大学ブドウ・ワイン学科内に本部（現在はデイビス市内のカリフォルニア大学キャンパスから少し離れた場所に事務所がある）があるAmerican Society for Enology and Viticulture (ASEV, ブドウ・ワイン学アメリカ学会)の日本支部をつくることができないうかということであった。カリフォルニア大学で教育を受けた人々が帰国後に支部を中心として集まり、アメリカの良い点を日本に取り入れていけたらよいと思った。早速、恩師カリフォルニア大学シングルトン教授にこのことを相談したのが ASEV Japan 発足の始まりであった。

ASEV Japan 設立の準備と交渉

1981年10月から1984年3月までの間、ASEV Japan創設に関する下交渉がシングルトン教授を通してASEV側と断続的になされた。1984年6月17日、筆者を代表とし、11人のメンバーよりなる ASEV Japan 設立準備委員会が山梨大学発酵化学研究施設内に設けられ、日本各地より21名の賛同者を得た。筆者は、1984年7月13日、ASEV親学会常任理事会において ASEV Japan 設立の交渉をするため、賛同者一人一人の要望書（1984年7月10日付）を携えて渡米した。この日から8月29日まで約2ヵ月間のデイビス滞在であった。交渉は、シングルトン教授を通して、ASEV親学会ナリー会長並びにチャプター・リエイゾン・コミティー・クリステンセン委員長との間で行なわれた。“ASEVが ASEV Japan の設立を許可してくれるまで何日でもデイビスに滞在します”との筆者の固い意志がASEV側に伝わった。これに答えてASEV親学会は予定を早めて8月24日の常任理事会で ASEV Japan 設立の可否を討議してくれるとの情報を得た。8月1日、シングルトン教授より、ASEV Japan 定款草案 (By-laws, Japanese Chapter, American Society for Enology and Viticulture) が提示された。この草案はシングルトン教授の手によるものでクリステンセン委員長と相談してまとめたようであった。筆者は数日慎重に検討後、日本の醸造界の慣習に必ずしも合わないと考えられるいくつかの条項の改定と親学会に所属しない ASEV Japan のみの会員の許可などを定款に書き入れるように申し入れた。筆者の申し入れのいくつかは入れられ、いくつかは認められなかった。1984年8月中旬、合意に達した定款の下での ASEV Japan 設立の承認をASEV親学会常任理事会に正式に求めた。8月24日午前11時ASEV親学会常任理事会に呼ばれた。シングルトン教授が介添えとして同席した。なぜ ASEV Japan を設立したいのかの理由、日本の

ブドウとワインの現状など様々な質問を受けた。何と答えたかはよくおぼえていない。前日までにシングルトン教授と十分に打ち合わせを行なっていたので、答えに窮すると筆者の代わりにシングルトン教授が答えた。そして、ついに、筆者がエグゼクティブ・ディレクターとしてまたチャプター・リプレゼンタティブとして日米両国の中間的な立場でASEV Japanの運営に責任をもつことを条件としてASEV Japanの設立が承認された。また、親学会側から毎年親学会代表を日本の年次大会に招待して欲しい（Eastern ChapterとPacific Northwest Chapterは毎年招待している）との要望が出された。これらに対して、筆者は、ASEV Japanが少なくとも5年に一度は親学会代表を招待するように努力すること、定款に基づいてASEV Japanの運営を行ない、筆者がなるべく毎年ASEV年次大会に出席し、ASEV Japanの活動を報告し、協議することを約束した。筆者は、ASEV Japan発足以来、インターナショナル・コミティあるいはチャプター・リエイゾン・コミティ委員としてASEV親学会の運営にも参加している。

ASEV Japanの成立と諸規則の整備

1984年11月23日、東京・麹町会館でASEV Japan設立総会並びに第1回総会が18名の会員が参加して行なわれた。設立総会では、ASEV Japan定款並びに設立経過が了承された。続いて第1回総会が行なわれ、会長には、横塚勇山梨大学名誉教授が選出された。定款により常任幹事会（後に常任理事会と改称）が設けられ、また理事会と事務局会議（後に幹事会と改称）並びに大会実行委員会が新設された。理事会は、このASEV Japanが日本全体のブドウ・ワイン産業の発展をめざすという理念から、広く全国の関係者の意見を聞き、賛同を得るために設けられた。当面の運営に必要な資金は、常任理事会メンバー及び事務局会議メンバー各人5～10万円を出し合って、この借入金でまかなったが、数年後にしか返済できなかった。初代会長時代の1984年11月23日～1985年06月30日に、ASEV Japan運営のための重要な諸規則が整備され、各役員会の役員選出基準が定められた。

ASEV Japan運営の基本方針として次のことが了承された。

- (1) ASEV Japanの定款の下で、アメリカ親学会の理念と方針に沿って運営すること。
- (2) 学術目的に限定し、ブドウとワインを同等に扱うこと。
- (3) 学会の運営や役員を選出に際しては公平かつオープンであること。

また、1985年01月15日の常任理事会で、ASEV Japanの常任理事会及び理事会メンバーの選出に当たっては、次の基準で候補者を選出することが決定された。

- (1) 次期会長候補者推薦の基準

専門会員であってブドウやワインの研究、製造あるいはこれに関連した分野において豊富な経験と識見を有し、以下のいずれかの条件を満たす者。

- a) 権威ある専門誌に少なくとも二つの論文を発表した者。
- b) 本会及びブドウやワインの分野で傑出した価値ある貢献をした者。

なお、会長はできるだけ産学から交互に選出することが望ましく、また常任理事会は原則として同一人を連続二期までしか次期会長候補者として推薦しない。

(2) 理事候補者の推薦基準

同一人を理事候補者として常任理事会で推薦する場合には原則として連続5期(1989年の常任理事会で連続2期までに改定)までとする。推薦は、地区、地区会員数、年齢、enology or viticulture いずれを専門としているか、産か学か等を考慮して決める。

アメリカ親学会よりASEV Japanが認められてわずか半年足らずで、会員数は飛躍的に伸び、1985年6月30日には専門会員51、準専門会員3、個人会友26、学生会員6、産業会友10、計96名(社)が登録されていた。この年の11月23日、第1回年次大会と第2回総会が、甲府市「ニュー芙蓉」で行なわれた。年次大会では、一般講演10題、セミナー2題が発表された。総会では、理事会規定の改定、事業及び会計報告、事業計画並びに予算案が審議された。このような年次大会と総会のスタイルは現在でも続いている。

1986年6月19日から6月30日の11日間、1986年度ASEVアナハイム年次大会へ横塚勇会長を団長とする22名の使節団が派遣された。大会期間中、ASEV親学会常任理事会主催の歓迎レセプションが行なわれ、答礼として使節団は親学会役員をディナーに招待した。使節団は、年次大会に出席するとともにASEV親学会がアレンジしたカリフォルニア大学並びにナパ、ソノマ、モデスト、フレズノの各ワイナリーを訪問し、視察と真の日米交流をはたした。

この訪問中、日米の学会運営の方法に関して若干の意識のずれを感じた。それは、筆者と親学会エグゼクティブ・ディレクター、セクレタリー、チャプター・リエイゾン・コミティー委員長との打ち合わせの中で明らかとなった。第一の問題は、ASEV Japan 独自のロゴ(レターや封筒につけるシンボルマーク)を作成し、それを親学会常任理事会に承認を求めたことである。ASEV Japan は親学会ロゴの使用を遠慮し、親学会はASEV Japan が独自のロゴを制定する動きをASEVの名の下で自由な運営をすることとして恐れ、双方の誤解を生んだ。これは後に親学会がASEV Japan の真意を理解し、ASEV Japan が親学会のロゴをそのまま使うことで決着した。第二の問題は、日本人を親学会会員として推薦する際の各会員種別の基準である。日本の学会では、通常正会員と学生会員に区別され、一般会員がさらに類別されることはない。ASEV親学会の定款は、ブドウやワインに関する教育を受けたか否か、またブドウ・ワインの研究や生産に従事しているか否かが重視され、このような二点を満たす人が正会員であり、その他は会友であるという考え方に基づいている。従って、日本国内でいかに著名な人でも、ブドウやワインの販売のみにかかわる人、出版関係の人、ワインの知識のある文化人は正会員とは見なされない、ということを親学会は厳格に守ろうとしていた。様々な角度から日本の特殊事情を訴えて、会員種別の厳格な適用の緩和を試みたが、これをはたすことはできず、何人かの日本人会員がASEV Japanを離れて行った。

ASEV Japan の発展と親学会代表の初来日

次の会長は民間から迎えた。1986年7月1日から3年間、大塚謙一メルシャン株式会社常務（当時、元国税庁醸造試験所長）が会長に就任した。産学交互に会長を選出するという原則に沿ったものであった。大塚会長の下で、第2（1986年）～第4回（1988年）年次大会と第3（1986年）～第5回（1988年）総会が行われ、ASEV Japanは日本の中で広く知れわたり新たな発展を遂げた。

第2回年次大会（1986年11月23日）は、ASEV Japanにとって記念すべき大会となった。それは、東京で開催されたこと、及びASEV親学会からシングルトン・カリフォルニア大学教授（元親学会会長）を迎えたことによった。この大会の成功によって、ASEV Japanが真に国際性をもった研究集団であることが実証された。

1987年になると、ASEV Japanの総会員数は172名（社）に達した。ASEV Japanの運営の中核である常任理事会の正式メンバーは、会長、エグゼクティブ・ディレクター、セクレタリー、トレジュラーの4名であったが、会員数の増加や年次大会の実施の恒例化に伴ない、役員数の不足が感じられた。1987年6月、筆者は、常任理事会内にディレクターを新設することを目的とした定款の一部改定を要請するために渡米した。その結果、常任理事会内に3名（1989年にディレクターを5名に増員するため、この問題で再度渡米）のディレクターが認められた。

同じ1987年6月、筆者は、ASEV Japanの発展のためにさらに重要な事項を親学会と交渉した。それは、ASEV Japan 年次大会の講演要旨を親学会誌 American Journal of Enology and Viticultureに掲載を求めた交渉であった。アメリカ国内の他の支部の講演要旨さえ掲載していない状況であった。この要請は、ASEV Japan 年次大会の講演を親学会での発表と同等化し、日本のブドウ・ワイン研究の実情を世界に知ってもらうことを目的としていた。幸いにも、ディレクターの新設と講演要旨のAJEV誌への掲載はASEV親学会常任理事会で好意的に取り上げられ、前者はこの年から、後者は翌年から実現した。後者はASEV Japan年次大会の価値を飛躍的に高めた。これらの重要案件の交渉にもシングルトン教授の大いなる助力があった。

1988年6月、ネバダ州リノ市で開催されたASEV親学会年次大会に大塚会長と筆者が出席した。大塚会長がASEV親学会幹部及びカリフォルニア大学ブドウ・ワイン学科の教授陣をリノ市内レストランでのディナーに招待し、ASEV Japanの運営への助力に対する感謝と一層の支援を要請した。この年の11月、ASEV親学会は、ASEV Japan年次大会へASEV元会長マルティーニ夫妻（マルティーニ・ワイナリー）を派遣した。マルティーニ氏はASEV親学会からのギフトとしてASEV旗を持参し、以後この旗は年次大会の際の講演デスクにかけられている。ナパの著名なワイナリーのオーナーの来日で、カリフォルニアと日本のワイン産業がさらに近くなった印象であった。この年、ASEV Japanの総会員数は200名（社）を越えた。

ASEV Japanの着実な発展

1989年7月1日、広保 正千葉大教授が第三代会長に就任した。二代続いた醸造出身の会長からブドウ栽培を専門とする会長へと引き継がれたわけである。1989年、ASEV Japan に二つの事務所が新設された。すなわち、千葉大・松井弘之助教授がセクレタリーに就任し、千葉大学に事務所が開設された。近畿大学には、編集事務所が開設された。ASEV Japan は会員に対する情報伝達手段としてASEV JAPAN NEWS LETTER をもっていたが、これを発展的に解消して、ASEV JAPAN REPORTS とし、実験講座、総説、会員よりの投稿、AJEV誌掲載論文の翻訳等を内容とする学会誌が創刊された。このASEV JAPAN REPORTSの編集担当ディレクターに近畿大・米虫節夫助教授（現編集委員長）が就任したのを機会に、近畿大学編集事務所が開設されたのである。

1990年6月、筆者とASEV親学会との役員構成に関する交渉がロスアンゼルスで行なわれた。その結果、ASEV Japan副会長の新設が認められ、翌年から新しい常任理事会メンバーに加えられた。この年の11月に行なわれたASEV Japan年次大会に、初めて現職のASEV親学会会長クリステンセン氏夫妻が来日した。クリステンセン会長はビッグなプレゼントを運んできた。それは、横塚 勇元会長に親学会終身名誉会員の称号が授与されたことであつた。元会長が日本人として最初の ASEV 会員であり、初めてAJEV誌に論文が掲載され、AJEV誌のEditorial Review Committee 委員を長く努め、また初代ASEV Japan会長となつたことが評価されたためである。

1991年7月嶋谷幸雄サントリー取締役が会長に就任した。純粹の民間人として初めての会長であつた。ASEV親学会の年次大会は、従来カリフォルニア州のサクラメント、アナハイム、ネバダ州のリノなどASEV本部のあるデイビス市に近い都市で開催されていた。しかし、この年の年次大会はワシントン州シアトルで行なわれた。ASEV Japanは嶋谷会長を団長とする27名よりなる第二次派遣団を組織した。6月20日より23日までシアトルに滞在した間に年次大会に出席するとともに、ASEV親学会がアレンジしたワイナリーを視察した。大会期間中の6月21日、ASEV Japanは、親学会常任理事会メンバー、AJEV誌編集者、ASEV事務所メンバー、カリフォルニア大学教授などを招待し、大パーティーをシェラトンホテルで開いた。その後ナパ、ソノマのワイナリーを見学後帰国した。

1992年6月のASEV親学会年次大会は、ネバダ州リノで行なわれた。この時に筆者がASEV親学会側と行なつた交渉は、ASEV Japanが成立以来最も重要なものであつた。それは、ASEV JAPAN REPORTSに原著論文を掲載する許可を得るための交渉であつた。シングルトン教授がまたこの我々の要請を実現するのに各方面に働きかけをしてくれた。さらにビクセンスタイン会長やボールトン・エグゼクティブ・ディレクターの協力も見逃せない。通常、ASEVへの要請は親学会会長あるいは関係する委員会の長への手紙（文書）と、口頭での説明で行なわれる。文書は、十分に双方が納得できる案としてから作成されるが、これらの文面の作成にはシングルトン教授の助力が大いに役立つ

た。ASEV Japanは郵便料の高騰に悩み、それ故 ASEV Japanを日本の学術団体として日本学術会議より認定して貰い、郵便料など学術団体に与えられている特典の授与を希望した。一方、ASEV親学会は、ASEVの（我々日本部会にとって）会誌はAJEVのみであることを主張し、逆に日本人会員の一層の投稿を望んだ。この際の交渉も、日米両方が折り合える中間点でなされた。ASEV JAPAN REPORTS中の原著論文は、日本のブドウとワインについての論文であること、その本文を日本語で書くこと、full paperはAJEVに投稿すること、従って原著論文は「ノート」あるいは「テクニカルレポート」の2種類、年に数報とすることが合意された。これによってASEV Japanは名実ともに学会としての体裁を整えた。

ASEV Japanの特色の一つは、日本各地の地域に根ざしたブドウやワイン産業に関するセミナーの開催である。カリフォルニア大学教授、アメリカ東部ワイナリーオーナー、スイス・酵母メーカー研究者、日本のワイン会社のエノロジストらによって、1985年4月3日と5月1日（山梨大）、1987年10月5日（山梨大）、1988年2月2日と7月9日（山梨大）、1990年6月12日（山形）に、さまざまなテーマでセミナーが行なわれてきたが、1991年7月14日に（株）アルプスで行なわれた“塩尻セミナー”は、年次大会に匹敵する規模で行なわれ、セミナーの在り方の良きモデルとなった。

1992年11月、ビクセンスタイン会長夫妻が第9回ASEV Japan年次大会（甲府）出席のために来日した。ASEV JAPAN REPORTSの新しいポリシーと役割が、“ASEV JAPAN REPORTS”誌投稿規定及び投稿要領としてまとめられ、ビクセンスタイン会長の承認を得て、第9回総会において発表され、了承された。

ASEV Japanの飛躍と今後の運営上の問題点

1993年7月、秋山裕一日本醸造協会副会長（元醸造試験所長）がASEV Japan会長に就任した。この年の10月末には、親学会兼日本部会会員153名、部会会員122名、部会産業会友43社、計318名（社）となった。現在もなお会員は着実に増加しつつある。この年より、ASEV JAPAN REPORTSに原著論文の掲載が始まった。それに伴ない、原著論文の投稿と審査に備え、岡山大学内に岡本五郎岡山大教授を委員長とする論文審査委員会が発足した。

ASEV Japanは今年1994年で設立満10年を迎えた。第1回から昨年までの第9回までの年次大会は甲府あるいは東京で交互に開催されてきたが、今年は、ASEV親学会アルダーソン会長夫妻を迎え、設立10周年記念大会を北海道、池田町で開催する運びとなった。

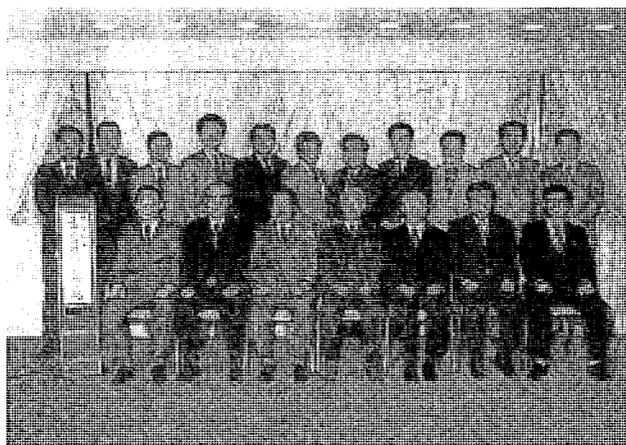
このように、ASEV Japanは各方面の多くの会員の努力と協力により順調に発展してきたが、運営上の多くの問題がある。本部事務局の業務を例にとれば、役員選挙の実施、常任理事会や理事会の準備と開催、年次大会やセミナーの準備と実施、各種印刷物の企画、作成、印刷、発送、ASEV JAPAN REPORTS 特集号の発行などの他、主として筆者自身及び筆者とともに働いている技官が行なっている業務として、各会員の入・退会・住所変更、議案の作成、ASEV Japan 年会費の徴収、予算の執行等の会計業務、

ASEV 親学会の年会費徴収、親学会への入会手続きや苦情の処理、事業報告や会計報告の作成及び親学会との種々の交渉・連絡、親学会へ報告する Executive Director's Reportの作成、AJEV誌エノロジー関係論文の邦文訳等がある。ASEV 親学会と交わした英文の往復文書のファイルは ASEV Japan 発足以来29冊、厚さ1m弱に達した。ASEV Japan発足後数年間は筆者の一日の労働時間の約半分を本部会の運営に費やし、近年運営の手順がマニュアル化してからでさえ、一日数時間を費やしている。現在の予算規模では到底実現できないそうもないが、本会がさらに発展するためには、このような業務を行なう常勤のスタッフが欠かせないと考えられる。ASEV Japanの年会費収入は200万円足らずである。この予算規模で、毎年年次大会とセミナーを開催し、年3回のASEV JAPAN REPORTSを発行し、2年に一度親学会代表を年次大会に招待している。表に現われない支援者の寄付や各役員個人の個人的な金銭的負担もまた指摘しなければならない。ASEV Japanの一般化とオープンで民主的な運営を目指した郵便投票による役員選挙の実施や複数の事務所の存在（続けるべきであるが）に伴う連絡調整の難しさもまた財務と労働の両面から運営を複雑にしている。

本稿は、紙面の都合で、歴代会長の期間で大まかに区切り、その期間のトピックスとASEV Japanの運営に関わる日米交渉の裏面史をかいつまんで述べた。ASEV Japanの発展は、歴代会長や各役員、ASEV親学会役員、理解と好意、シングルトン・カリフォルニア大名誉教授の助力、各ワインメーカーの援助、近畿大、千葉大及び岡山大の教職員及び学生の不断努力と奉仕によるところが大きい。ASEV Japanの本部がある山梨大学発酵化学研究施設の教職員は、日本のブドウ・ワイン産業の発展を目指して研究施設全体の事業としてASEV Japanの運営に協力し、裏方を努めることで合意している。これらの諸氏をエグゼクティブ・ディレクターとして、また事務局長として心より御礼申し上げ、筆を置きたい。



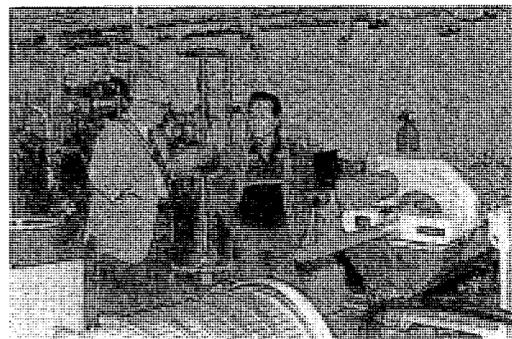
1984. 8. 24 ASEV 常任理事会
ASEV Japan 誕生の瞬間です (ナリー会長と私)



1984. 11. 23 (東京)
ASEV Japan 設立総会



1986年大会 シングルトン教授来



1986年大会 醸酵化学研究施設にて(山梨大)



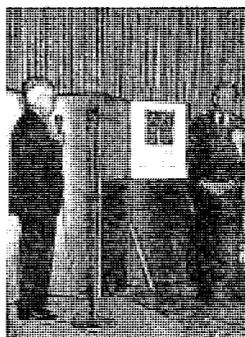
1986年大会 醗酵化学研究施設にて



1988年大会 マルティニ元会長来日
(甲府のレストランにて)



1990年大会 クリステンセン会長来日
(東京)



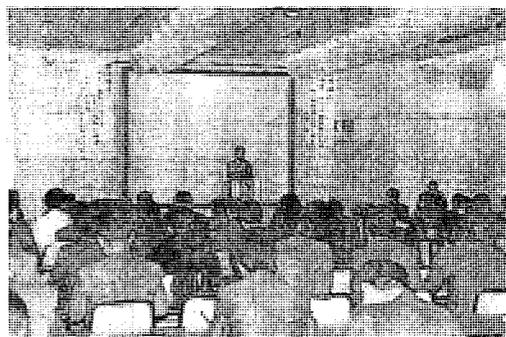
1990年大会 クリステンセン会長
(東京大会にて)



1992年大会 ビクセンスタイン会長
(甲府)



1992年大会 ASEV Japan 大会懇親会 (甲府)



1992年大会 (甲府)